２０２３年度
入学試験問題

国　語

２月１１日

受験番号	氏　　名

中村高等学校

問題は次のページからです。

一

次の各文の――を付けた漢字の読みがなを書きなさい。

(1) 強敵を相手に惜敗した。
(2) 不安と期待が交錯する。
(3) 人生の岐路に立つ。
(4) 工事の進行が滞る。
(5) 夜空の星を仰ぐ。

二

次の各文の――を付けたカタカナの部分に当たる漢字を楷書で書きなさい。

(1) センレンされたデザイン。
(2) 国のハンエイを願う。
(3) 産業の発達をソガイする。
(4) しばらく外出をヒカえる。
(5) 突然の知らせにアワてる。

三

次の――①～⑤の語の読み方を現代仮名遣い（平仮名）で書きなさい。

月日は百代（はくたい）の①過客（くわかく）にして、行きかふ年もまた旅人なり。舟の上に生涯を浮かべ、馬の口②とらへて老いを迎ふる者は、日々旅にして旅を栖（すみか）とす。古人も多く旅に死せるあり。

予（よ）も③いづれの年よりか、片雲（へんうん）の風に誘はれて、漂泊の思ひやまず、海浜（かいひん）にさすらへて、去年（こぞ）の秋、④江上（かうしやう）の破屋にくもの古巣を払ひて、やや年も暮れ、春立てる霞（かすみ）の空に、白河（しらかは）の関越えむと、そぞろ神の物につきて心をくるはせ、⑤道祖神（だうそじん）の招きにあひて、取るもの手につかず。

四 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

（設問の都合上、本文を改変、省略したところがあります。）

＊字数指定のある問題については、句読点・記号も字数に数えます。

あるイメージについて、一定の見方が受け入れられていると、我々は無意識のうちに、言われた通りの意味を絵の中に探すようになる。①ヴィジュアル・イメージの理解には、②こういうパワー＝権力構造があるのであり、そこから離れて個人が「自由に発想する」ことは簡単ではない。我々は生まれたときから、すでにさまざまなイメージに取り囲まれ、それらについて③陳腐な意味や説明を延々と聞かされ、その説明が頭に染みついているような状況にある。つまり、我々は、普通、物事を「囚（とら）われ」ながら見ているのであり、「自由な見方」をしているなどとはとても言えた義理ではないのだ。

A 、「自由でありさえすれば良い」などと粗雑なことを言っているのではない。「囚われた見方」は、世間のルールを教え、他人とのコミニュケーションも可能にする。B 、その代償に、我々は、すでに④規律に合わせて世界を見て、その中でグルグルと回る牢獄（ろうごく）に閉じ込められるのである。こんな状態では、どこにも新鮮な見方などない。

C 、個人の自由な見方を獲得するには、現在、世上で流通している「常識」に逆らっても、新しい見方を提示していかなければならないのだ。「人それぞれ」などというだらけた態度では、元々流通している皆と同じ見方に戻るだけであって、創造的な見方とか新しい見方などそもそもできるわけがないのである。

創造的な見方 ＝ 自然に備わっていない ＋ 経験と試行を通じて獲得する

だから「人それぞれ」などという言い方は、人間の感覚やセンスに対する楽観的すぎる解釈でしかない。我々は、見ているつもりで実は何も見ていない、ということがしばしばある。きれいな海辺を見て「まるで、写真みたいだ」と感じるとき、我々は目の前の海辺を見て感動しているわけではない。むしろ、眼前の砂浜より、過去

に刷り込まれた「きれいな海辺」というイメージをなぞっているだけなのだ。

そんな繰り返しに、固有の「想像力」や「感受性」があるわけがない。オウムのように、意味も分からずイメージを反復している自動運動をしているのにすぎないのである。本当に「人それぞれ」であるためには、個人が⑤経験と試行を通じて「自分の見方」を獲得していかなければならないのであって、我々には「ものの見方」が自然に備わっている、などという言いぐさは怠惰な幻想にすぎないのだ。

図2-3　靴にぴったりあう足のイラスト
出典：バーナード・ルドルフスキー『みっともない人体』鹿島出版会

それをはっきりさせるために、図2-3を見てみよう。これは、女性が履くハイヒールにぴったりとはまる「美しい」足の形だという。

ファッションはだいぶ変わってきたとはいえ、今でもハイヒールを「女性らしい美しい足」を表現するものと感じる人は少なくない。だから「フェミニン」や「セクシー」を表現しようとする写真では、モデルがハイヒールを履くことが多い。だが、その中の素足がこのような形をしていたら、それはもう「美しい足」とは言われないだろう。それどころか「異様な足」とか「奇形」とか言われかねない。実際、足指が「美しく」デザインされた靴に適応して、親指が第二指側に折れ曲がると、それは「外反母趾（ぼし）」という病的状態だと言われる。つまり、美しい足を表現する靴に適応した足は、親指が「不自然」に折れ曲がり、「変形」し病的だと見なされる。⑥この矛盾は一体何だろう？

としたら、次のような疑問も浮かんでくる。「美しい足」とは、そもそも、どういうものなのか？　もし、ハイヒールにぴったり合うように進化した「美しい足」が本当は美しくなく、むしろ、グロテスクで醜いと感じるとしたら、なぜ、我々はハイヒールのような靴を「美しい」と感じてしまうのか？

「外反母趾」の女性に聞くと、長く歩くと足が痛くて、

とてもつらいという。では、なぜ、我々は、わざわざ、そんな苦痛を与えるような靴を女性に履かせるという文化を発達させたのだろうか？ 昔の中国では「纏足（てんそく）」といって、女性の移動を不自由にするために、足をむりやり小さくする処置をして、足の小さい女性を「美人」と称したそうだが、ハイヒールも、それと同じように、わざと苦痛を与えて、女性から移動の自由を奪い、男性の所有物であることを示す道具になっているのだろうか？

そのうえで、そういう支配権力関係を正当化するように、あえてハイヒールを「美しい」とねじ曲げたのだろうか？

こういう思考が当たっているかどうかは、この際、問題ではない。大事なのは、画面の中の問題や矛盾に気づくと、そこからさらに思考や想像を続けられる、ということだ。「どうしてそうなのか？」「どういう仕組みになっているのか？」「何の関係があるか？」と、さらに次々に思考や想像が続いていく。その思考・想像のプロセスを楽しめれば、絵や写真から刺激を受けて自分の精神活動が活発化したことになろう。

絵・写真を見る
←
要素・関係を見て取る
←
問題や矛盾に気づく
←
思考・想像が発展・活発化する

もちろん、それだけで「どんな形の足が美しいか？」という⑦深遠な問いに決定的な解答が出る、というほど問題は簡単ではない。それでも、このイメージを仔細（しさい）に眺めることで、我々は「美とはいったい何なのか？」という大きな問題にあらためて直面する。それは、「不格好！」とか「変形している！」というボンヤリした感想を持つより、数段深い理解になるし、そこから、しばし自分の感覚や思考を発展させることが出来れば、十分面白い体験になる。自分の見たものを、ためつすがめつ、新しい発見をするだけでなく、それを人に話せば、その人を楽しませることができる。たとえば、こんなふうに。

A：ハイヒールって好き？
B：まあ好きかな？足がキレイに見えるし、女性らしさが際立つだろう？　君は履かないの？
A：ハイヒール履くのけっこう大変なのよ。足が疲れるし。
B：でも頑張って履くオシャレな人も少なくないよね。
A：じゃ、この絵はどう？　美しいハイヒールにぴったりの美しい足！
B：いや、ちょっと待って。こんな中指が親指より長い足なんて存在しないよ。
A：もちろん、こんな足の人はいないけど、ハイヒール好きなあなたなら、こういう足が理想でしょ。
B：いや、ちょっと待って……やっぱりおかしいよ。普通は親指が長いし。
A：そういう普通の足で無理にハイヒールを履くと「外反母趾」になるわけ。あなたは女性にそういう足になれって言うのね？
B：そうは言っていないよ。やっぱり足は自然な方が美しいだろう？

A：そういえば、昔の中国では「纏足」といって、足に布を巻き付けたりして無理矢理小さくしたんだってね。ハイヒールってちょっとそれに似ていない？
B：そんなこと考えもしなかったよ。
A：でも、ハイヒール好きってのは「纏足」と同じ思想かもね。女の人の運動能力を奪って、自分の所有物にしようという男性支配の社会の象徴なのよ、あなたもその一味というわけね？
B：ちょっと待ってよ……そこまで言わなくったって……
A：いいえ、今日は言わせてもらいます。自分がハイヒールで女性を痛めつけるタイプの人間だということを意識してもらいたいから。

ハイヒールひとつから、こんな対立も起こる。我々の世界には、イメージが溢（あふ）れている。それをただぼんやりと見過ごすのではなく、そこに注目することで、刺激を受けて、自分の思考・想像を展開・発展できる。もしかしたら、それは快くないかもしれない。それでも、この

世界の仕組みや自分の感じ方について何か発見が得られれば、それだけでも⑧充実した時間を過ごすことにはなりそうである。

（吉岡友治『ヴィジュアルを読みとく技術
――グラフからアートまでを言語化する』筑摩書房）

150

問一　――――線①「ヴィジュアル・イメージ」とありますが、これを説明したものとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、外見から得られる情報
イ、人目を引く画像
ウ、視覚から感じる印象
エ、仮想空間における記号

問二　――――線②「こういうパワー＝権力構造」とありますが、この部分を説明したものとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、一つ一つの対象について、見方を教えられると、その見方を通してしか物事を見ることができなくなってしまう。
イ、ある対象について、ある程度浸透した見方が生まれると、気づかないうちにその見方を通してしか見られなくなっている。
ウ、目の前の物事に対して、一定の印象を抱くと、意識しないうちにものの見方が第一印象に引きずられるようになる。
エ、絵画の鑑賞方法は本来自由であるのに、権威的な者が指示した見方が、あたかも正しい鑑賞方法と受け取られてしまう。

問三　――線③「陳腐」の意味として適切でないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、つまらない
イ、ありきたり
ウ、古くさい
エ、ばかげている

問四　A ～ C に入ることばを次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア、また
イ、しかし
ウ、ところで
エ、したがって
オ、もちろん

問五　――線④「規律に合わせて世界を見て」の具体例として適切なものにはAを、不適切なものにはBを、それぞれ解答欄に記しなさい。

ア、外国人が、頂に雪の無い富士山を見て「あの山は富士山ではない。」と思った。
イ、テレビの占いコーナーで紹介されたラッキーアイテムを身につけて出かけた。
ウ、ゴミの分別ができないひとを見て、非常識だと感じた。
エ、「あのひとは血液型が○型だから細かい作業が得意なのだ。」と思った。

問六　――線⑤「経験と試行を通じて『自分の見方』を獲得」とありますが、どのような意味ですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、個性的な視点を獲得するためには、他のひとには出来ない経験を通じて自己の特色を練り上げる必要がある。

イ、魅力ある視野を獲得するためには、様々な経験を通して自己に備わる視点が引き出されるようにするべきである。

ウ、物事の善し悪しを見分けられる強い視点を持つためには、多くの出来事に関わることで経験値を積むべきである。

エ、自分なりのものの見方を獲得するためには、多くの体験や成功、失敗を通じて自己の眼を鍛えるほかはない。

問七　――線⑥「この矛盾」が指す内容を、三十五字以内で記しなさい。

問八　――線⑦「深遠」の意味として適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、先が長い

イ、奥が深い

ウ、底が深い

エ、淵が広い

問九　――線⑧とありますが、AとBの会話において「充実した時間を過ごし」しているのはBだといえます。なぜBにとって「充実した」といえるのですか。会話の内容に即して百字以内で説明しなさい。ただし――線⑧がある段落の内容もふまえること。

五

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

（設問の都合上、本文を改変、省略したところがあります。）

＊字数指定のある問題については、句読点・記号も字数に数えます。

高校生作家として一躍有名人になった「榛名忍（はるなしのぶ）」は大学三年生の夏、なかなかヒット作を書けないでいた。スランプのなか、競歩を題材にした小説を書くため、大学の陸上部に所属している競歩選手の「八千代篤彦（やちよあつひこ）」に取材をすることになる。現在は他大学の合宿に二人が参加し、競歩の日本代表である「蔵前修吾（くらまえしゅうご）」（大学の卒業生として合宿に参加）から競技に対することで八千代が指摘を受けている場面である。八千代はそれが原因で合宿所から飛び出してしまう。

ロング歩で使っている海沿いの道を自転車で進んでいくと、海水浴場の片隅に人影を見つけた。

薄手のウエアは見るからに寒そうなのに、長身は微動だにせず海を眺めている。

「八千代っ！」

叫んだら、冷たい空気に喉の奥がピリッと痛む。砂浜に自転車で乗り入れると、柔らかい砂にタイヤを取られて盛大に転んだ。

「あぶっ！」と間抜けな声を上げて、背中から思い切り浜に落下した。

「くっそお……インドア派に無茶（むちゃ）させやがって」

起き上がると、八千代は同じ場所にいた。A呆然とこちらを見ていた。

自転車をその場に置きっぱなしにして、八千代のもとに駆けていく。

「先輩が目の前で盛大にすっ転んだんだから、助けに来るくらいしろよ」

大袈裟（おおげさ）に背中と腰を摩（さす）ってみせても、八千代は何も言わず忍を凝視したままだった。頭から爪先まで、何度も視線を往復させる。

「やっぱりこういうとき、人間って海に行くんだよな。俺が読んできた小説の登場人物って、みんなそうだった」

自転車の前カゴに入っていたウインドブレーカーを渡してやる。強い風が海から吹いてきて、八千代は諦めた様子でそれを着込んだ。

「別に、拗（す）ねてふて腐れてるだけなんで、夕飯の時間ま

でには帰りますよ」
「じゃあ、夕飯の頃まで付き合うよ」
遮るものが何もなくてすこぶる寒いが、忍は砂浜に腰を下ろした。両足を、さらさらの砂の上に投げ出す。だいぶたってから、八千代が隣に座った。
誰もいない砂浜で、黙って海を見ていた。特に面白いものもない。冬だし暗いし、夜景や灯台の明かりが見えるわけでもない。
①だから、かもしれない。
「俺のデビュー作、二十万部売れた。新しい世代の書き手が現れたって」
口から、言葉がぽろぽろとこぼれていく。「凄(すご)いじゃないですか」と、八千代が答えた。
「二作目は、プレッシャーもあったけど、結構楽しく書いたんだ。『読者の期待を軽々と越えた傑作だ』って、文芸誌に書評が載った」
「それも凄いですね」
「三作目は、デビューした玉松書房じゃないところから出した。俺は気に入ってる話だったのに、売上げがイマイチ振るわなくて、ネットでもいい感想を見かけなかった。それで俺も、書きたいものを楽しんで書くだけじゃなくて、ちゃんと数字とか需要とか、そういうことを考えないといけないんだなって思った」
八千代は何も言わなかった。満ち潮ってわけでもないのに、波の音が近くなった。
「四作目は、正直、いろいろ考えすぎて書くのがきつかった。担当からたくさん修正指示が入って、何がいいのかわからなくなって、無理矢理完成させた。一昨年の一月に出した本も同じような感じだったな。去年出した『アリア』は、久々にそういう息苦しさを抜け出せたような気がしたんだけど、結局未だにスランプのままだ。世間はもう、天才高校生作家のことなんて忘れてる」
波の音が、また近くなる。
「いつからだろ、思ったように書けなかったって気持ちとか、期待に応えられなかったって気持ちを、次の作品に投影するようになったの。失敗から逃げ回るみたいに、自分の中にできちゃった穴を次の作品で必死に埋めるようになったの」

穴は、増えていく。忍の心はぼこぼこの穴だらけになっていく。「天才高校生作家」でなくなった自分が身につけるべき新しい《価値》を探して、ゾンビみたいに彷徨(さまよ)う。

「失敗して、次の挑戦でその穴を埋めようとするんだよ。蔵前さんはああ言うけど、俺はそういうものだと思う」

最初から何もかも上手くいくなら、それに越したことなんてない。次こそは、次こそは……何度《次》を積み重ねたって辿(たど)り着けないのかもしれない、もう《次》なんてないかもしれないと怯(おび)えながら、それでも《次》を信じて生きている。

②「俺は負けたんですよ」

ぽつりと、八千代が言った。

「長距離で負けた。それは事実なんです。競技そのものを諦めて、普通に大学生やって普通に就活して普通に就職する選択肢だってありましたけど、駄目だったんですよ」

駄目だったんです。

波の音と音の間で、八千代はその言葉を繰り返した。

「俺ね、小学生の頃から走るのが好きで、中学、高校と陸上ばっかりだったんですよ。はい、今日から別の目標を見つけて、頑張って生きていってください。なんて言われても、何をすればいいかわからないんです。何ができるかもわからないんですよ。だから、競歩は俺に価値をくれるんじゃないかと思ったんです」

そうだ。俺には価値が必要なんだ。作家であり続けるためには、価値がないといけない。書くことをやめたら、俺は何者にもなれない。

書き続けること以外に、自分を確かめる方法がわからない。

③「俺も負けたんだよな」

寒さに、指先の感覚が遠のいていく。鼻の頭が痛くなって、鼻水を啜(すす)った。

「そうだな。そうだよな、俺は負けたんだ。負けたってわかってるくせにぐちゃぐちゃ言い訳して、スランプだとか、『どうせ俺なんか』なんて言ってふて腐れて拗ねてたんだ。認めるよ、負けたんだ。俺は、負けたんだ」

「先輩は、誰に負けたんですか？」

他の作家に、本に、世間からの期待に――そこまで考えて、どれも合っているけれど、どれも違うと気づいた。

「榛名忍に、だ」

B

天才高校生作家という肩書きを、期待を、重いと思った。でも、いざ「誰からも期待されなくなった自分」を想像すると、期待されたいと思う。期待される自分でいたい。期待に応えられる自分でいたい。

もっと上手に夢を見るはずだったのに。胸の奥にいる怖いほど純粋な自分が、そうやって嘆いてる。

「俺は、俺に負けてきたんだ。本を読むのが好きで、小説を書くのが好きな俺に、ずっと負けてきた。俺の期待を裏切ってきた」

ふふっと、八千代が笑うのが波の音に紛れて聞こえた。無意識に足下にやっていた視線を彼へ移すと、確かに微笑(ほほえ)んでいた。

「元天才高校生作家も、大変ですね」

「ああ、大変だよ。凄く大変だよ」

④ 今、とても辛い話をしているはずなのに。どうしてこいつは笑って、釣られて俺も笑ってしまうんだろう。

「帰ろう。帰って飯食って風呂だ。明日はまた20キロ自転車漕(こ)ぐんだから」

立ち上がると、内腿(うちもも)にびきんと痛みが走った。呻(うめ)きながらズボンについた砂を払うと、八千代が「え、明日もやるんですか?」と聞いてきた。

「やるよ。遊びに来てるんじゃないんだから」

浜は真っ暗になっていた。手探りで自転車を探し、砂の上を引き摺(ず)って歩いた。

「どういう小説にするんですか?」

浜から歩道に出たところで、八千代が聞いてくる。自転車を押す忍の後ろで「もう一年以上取材してますけど」と冷えた両手を擦り合わせる。

⑤ 「王道の青春スポーツ小説にはしたくないな、って思ってる」

「本を読まない人間には何が王道なのかわかりませんが、先輩がそう思うならそうすればいいんじゃないですか」

「でもなあ、自信ないんだよ。素直に、みんなが好きになってくれそうな話にした方がよかったって、本が発売されてから思うんじゃないかって」

自信がないと素直に言えてしまった自分に、驚いた。不思議と頬が緩む。俺の中にもまだ「自信がない自分」を笑うだけの心の余裕があるんだ。

「絶賛スランプ中の小説家が、ひょんなことから競歩選手と出会うんだ。小説家は競歩を少しずつ知りながら、競歩の小説を書いていく。競歩と自分の作家人生を重ね合わせて、小説家は、自分のあるべき姿を模索していく」

砂粒のついた靴裏が、アスファルトを擦る音。ざらついた二人分の足音。随分遠くに行ってしまった波の音。すぐ側を、自動車が一台、走りすぎる。背後から聞こえていた足音が、戸惑ったように乱れる。

「……え、それ、小説のあらすじですか?」

困惑した様子で、八千代が忍の顔を覗(のぞ)き込んでくる。街灯が逆光になって、彼の顔に影が差す。それでも、目を瞠(みは)って驚いているのがわかった。おかしいくらい、わかった。

「うん、そう」

「悪いこと言わないんで、違う話を書いた方がいいと思いますよ」

「多分、みんな同じことを言うんじゃないかな」

書こうとしている忍自身がそう思っているのだから。もっと、より多くの人が楽しめるような、エンターテインメント性に富んだドラマチックで爽快感のある話にした方が、お前を作家として延命させてくれるんじゃないかって。

「だから、書くんですか?」

忍が言いたかったことは、八千代のその一言にすべて詰まっている気がした。

そうだ。だから、書くんだ。延命じゃなくて、新しい価値を見つけるために。東京オリンピック開催決定のあの日から、前に進むために。

合宿所に戻ったら、ロビーに蔵前がいた。ベンチに腰掛け、膝に頬杖(ほおづえ)をついて、忍と八千代に「おう、おかえり」なんて言ってくる。

忍が動くより先に、八千代が一歩、大きく前に出た。

「蔵前さん、さっきはすいませんでした」

音もなく蔵前の前に立ち、ゆっくり頭を下げる。そのまま、低く擦れた声で、言った。

「東京オリンピックで歩きたいんです」
顔を上げた八千代の背中を、忍は黙って見つめていた。宣言をしたのは八千代なのに、自然と唇を引き結んでしまう。
「走ることを諦めたんです。箱根駅伝を諦めたんです。そんな自分を諦めきれなくて、競歩を始めました。未だに心のどこかで、本当は走っていたかったって、確かに思ってます」
八千代が息を吸う音がする。吐く音がする。
「それでも、今は、これ以外にわからないんです。自分が生きてるってことを、歩くこと以外で実感できない」
上擦った語尾に、蔵前の目が細められる。何も言わず、彼はゆっくりと首を縦に振った。
「あらゆる思想は、損なわれた感情から生まれる」
唐突に、蔵前はそんなことを言った。八千代は「はい？」と身を乗り出し、忍は蔵前の言葉を反芻（はんすう）した。確か、海外の思想家の言葉だった気がした。名前は、確か……。
「えーと、蔵前さんは、エミール・シオランがお好きで？」
「いや、全然。好きなアーティストのミュージックビデオで見たから覚えてただけ」
蔵前は八千代に視線を戻す。口元は微笑んでいるけれど、目は真剣だった。世界陸上のときと同じ、底光りするような凄みが瞳の奥に潜んでいる。「今、その言葉を思い出した」
よっこらしょ、と立ち上がった蔵前は、一度だけ八千代の肩を叩（たた）く。軽やかな手つきだったのに、堪（たま）らなく力強い。
「挫折から始まるのは、いいと思うよ。でもいつまでも挫折に引っ張られてると、呑（の）み込まれて勝てるものも勝てなくなる」
さあ、飯だ飯だ。楽しそうに言って、スキップでもするような足取りで、蔵前は食堂へと歩いて行く。
「八千代、俺達も行こうよ。腹減った」
八千代は数拍置いてから「そうですね」と答えた。ただの返事なのに、こちらの胸に染み渡ってくるような、不思議な温かさがあった。
⑥ 今この瞬間、この場所から、何かが始まるような気がした。

（額賀澪『競歩王』光文社）

問一　═══線A・Bの語句のここでの意味を次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

A　呆然

ア、あっけにとられているさま
イ、全く興味を示さないでいるさま
ウ、あきれていらいらしているさま
エ、恐怖で動けないさま

B　肩書き

ア、その人が考えている理想や現実
イ、その人自身の性格や個性
ウ、その人にあてがった目標や課題
エ、その人を特徴づける社会的な地位や称号

問二　═══線①とありますが、何が「かもしれない」のか。適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア、忍が八千代に小説を書くことの大変さを理解させることができたのは、一緒に同じ距離を歩いたからかもしれないということ。
イ、忍が八千代に様々な思いを打ち明けることができたのは、周囲の状況や雰囲気がそうさせたのかもしれないということ。
ウ、八千代が忍に長距離走の大変さを伝えることができたのは、競歩を通して同じ苦痛を分かち合った者同士だからかもしれないということ。
エ、八千代が忍から小説家の大変さを聞き出すことができたのは、同じ大学だからかもしれないということ。

問三　――線②、③について説明した次の文の（　1　）～（　2　）に入る言葉を、本文からそれぞれ指定した字数で抜き出して答えなさい。なお、（　2　）には同じ言葉が入ります。

八千代は長距離で負けてしまったけれども、（　1　二字　）に（　2　五字　）を見いだそうとしているのを聞いて、忍も「榛名忍」に負けたことを認め、（　2　五字　）を見いだそうとしている。

問四　――線④とありますが、辛いのに「笑ってしまう」という行動を忍は後にどのように捉えて受け止めましたか。解答欄にあうように五字以内で本文中から抜き出して答えなさい。

問五　――線⑤とありますが、似たような表現の箇所を四十五字以内で抜き出し、始めと終わりの五字を答えなさい。

問六　本文中に五か所ある〰〰〰線のように波の音がくり返し出てくるが、この「波の音」は何を象徴していると言えますか。最も適当なものを選び記号で答えなさい。

ア、冬の寒さと天気の悪さ
イ、忍の心の内にある迷いや不安
ウ、二人が浜辺で過ごした時間
エ、八千代と忍の心の距離感

問七　――線⑥とありますが、このあと忍は作家として、どのような道を進むと考えられますか。百字以内で書きなさい。

以下、余白です。